

循環器領域における 治療と仕事の両立支援

企画：神谷健太郎

(北里大学医療衛生学部 教授)

心疾患の治療の進歩による予後の改善，労働人口の減少，社会的包摂の促進，心疾患への療養・就労両立支援指導料の拡大など様々な理由から治療と仕事の両立支援の必要性が叫ばれている。また，企業の側からも，従業員等の健康管理を経営的な視点で考え，戦略的に実践する「健康経営」に関する取り組みが行われるようになってきており，従業員等への健康投資を介して組織の活性化をもたらす，結果的に業績向上につながると期待されている。

筆者の専門はリハビリテーションであるが，リハビリテーションとは「全人的復権」，「人間らしく生きる権利の回復」を意味する言葉であり，職業復帰や就労の質向上を通して生活の質を高めることはリハビリテーションにおいても従来から重要な目標の一つと考えられてきた。しかしながら，就労の可否や働き方については医療の視点を中心に展開されることが多く，治療と仕事を持続可能なかたちで支援できてきたかというとはなはだ自信がない。

40代の企業コンサルタント・講師をしていた急性心筋梗塞後の患者との出来事を思い出す。5 METs 程度の運動負荷中の心拍数や血圧，自覚症状は全く問題がないのに，仕事はかなりきついという。実際にその場をシミュレーションして講演をしてもらったところ，心拍数は5 METs の運動時の心拍数を遙かに超え，140 bpm が持続し，開始後5分で汗をかき息切れをしていた。実際の講演の場であればさらに上昇していただろう。

これは単なる一例に過ぎず，レクリエーションでの運動やスポーツはある程度，医療機関内でも状況を再現して評価をすることができるが，実際の仕事となると精神的な要素や人的・物的な環境など極めて多様であり，職場をよく理解している産業医や就労支援コーディネーター等とのコミュニケーションが重要になってくる。

今回，執筆いただいた筆者の方々は，循環器医師，心臓リハビリテーション専門医，産業医，社会福祉士など様々な立場で活躍している方々であり，本分野の理解を深めるのに大変役に立つと確信している。50年以上の歴史がある雑誌「心臓」において，初めて「治療と仕事の両立支援」の特集を組ませていただいたことを幸運に思うと同時に，改めて執筆いただいた先生方に感謝申し上げます。



HEART's Selection